

---

# ライラックの庭

cian

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ライラックの庭

### 【著者名】

cian

【Zコード】

N9932

### 【あらすじ】

ある事情で女性不信になつたデイヴィッドは、ライラックの匂い  
薫る庭で一匹の白い犬とその飼い主に出会つ。

それは、社交界に疲れた彼の心を癒す物語の始まりであった。

## 序章（前書き）

中世イギリスをモチーフとした、恋愛小説です。  
初投稿で不慣れなところも多いのですが、お読みになっていただけたら幸  
いです。

白い花が満開に咲き誇る木の下で、彼女はふと視線を上げた。

目に映るは人間の男女。一見恋人同士かと思つたが、女が一方的に男に寄り添つている姿に違うかもしれないと思い直す。

おそらく2人はこちらの存在に気が付いていないのだろう。あえて教える必要もないし、彼女も邪魔をする気はなかつたので、くるりと踵を返したが、女の激しい声が耳を貫いて、驚きの余り足を止める。

「ふざけないでよっ！」

振り返れば、男が片耳を押えてしかめ面をしていた。

至近距離というのもあるだろつが、人間である彼がそれだけうるさいと感じたならば、彼女がうるさいと思つのは当然だ。犬である彼女の聴力は人間の数十倍はあるのだから。

男が、女とは対照的に静かに告げる。

「悪いが、申し出を覆す事はしないよ、レディ・カーライル。私は君と結婚する気はない。婚約は解消する」

「式まであと一週間もないのよ！？」

「君は私を何も知らないと思っているだろつが、私の目も耳も節穴ではないのだよ。東屋での密会は楽しかったかい？」

「なっ！」

「しかも、お腹には子どもがいるとか。そのまま黙つて結婚すれば私の子とでも誤魔化せると思つたのかな？私と君との間にはそんな事実はないというのに」

その言葉に女は確かに逆上したようだ。数秒後、何かを叩く音が庭に響き、聞き取れないほど早口に女が何かを喚きたてた。

それに対し男はどこまでも冷静に返事をする。

「悪いが、君が社交界にいくら毒を流そうと醜聞を曝そと、私は君の援護をするつもりはない」

「人でなし！」

「なんとでも言つがいい。その代わり、子どもの父親に責任を持つ  
よつ進言はさせてもらひよ。」

木陰に潜んだ彼女にはよく見えないが、聞こえる聲音はとても冷  
やかで、思わず女に同情しそうになる。しかし、その女が先日彼女  
を汚らわしいものを見る目つきで下げずんだ相手だと気がついたの  
で自業自得だと心の内で呟く。

やがて女が苛立ちを隠さない足音で遠ざかり、男だけになる。  
すると、男が思いもよらない行動に出た。彼はなんと、彼女のい  
る木陰を見て軽く手招きをしたのだ。

「おいで」

先ほどまでの冷やかな視線はどこへ行つたのか、実に柔らかな笑  
顔で彼は彼女を迎える。

戸惑いながらも静々と近寄ると、大きな手が彼女の頭を撫でる。  
その手つきにうつとりとしながら身を寄せると、彼は嬉しそうに顔  
を綻ばせた。

「いい子だ。よく躊躇られてるんだな」

それは一般的には褒め言葉なのだろうか。ただ、彼女の主人が聞  
いたら顔を顰めていただろう事は想像ができる。愛するべき彼女の  
主人は、彼女を教育はしても躊躇る事はしていないと常々周りに言  
つているのだ。

一介のグレート・ピレニーズである彼女には人間の言葉のニュア  
ンスなどわからない。それでも、目の前の彼が好意からその言葉を  
告げた事はわかつたので、彼女は抵抗する事もなく撫でられるま  
に任せることにする。

彼はしばらく頭を撫でた後、楽しそうに彼女を抱きよせる。彼女  
から見ても煌びやかな衣装を汚していいものかと一瞬逡巡したが、  
彼が望むままに抱き寄せられた。彼の肩に頭を乗せると、彼が優し  
く背中を擦ってくれたので心地よさに目を閉じた。

ふと、その手が止まり、彼が小さくため息を吐くのが聞こえる。

何事かと首を向けようとしたが、しっかりと抱きかかえられているためそれは叶わない。

「…そのまま結婚した方が、紳士としては正しいのだろうな」

ポツリと呟いた言葉は、先ほどの女とのやり取りの続きだらう。苦しげな声に、彼女はピタリと動きを止める。

「でも、他の男の子どもを宿した女を妻にする事はしたくなかったんだ」

それは、冷徹に女を切り捨てた男の声と同じだと思えないほど弱々しかつた。

彼の告解を要約すると、婚約した女性は他の男と密通し子どもを成したらしい。てっきり彼が父親だと思つた侍女の祝いの言葉で、彼はその事実を知つた。自分にはまったく覚えのない子どもを妊娠した婚約者に、彼は決別の言葉を言い渡した。

結婚予告も出し、正式な式まで残り5日。名誉のためにそのまま結婚するべきだったのかもしれない。自分の名誉のため、そして彼女の名誉のために。彼女は列記とした伯爵家の娘であり、名誉は何にも増して重んじられる。たとえ彼女が淑女でなかつたとしても、その事は秘密裏にされているのだから。

浮氣相手はプレイボーイとして名高い子爵家の三男坊で、公爵である彼に比べ地位も金もない。だから婚約者はそのまま結婚しようとしたのだろう。そんな屈辱を与えた相手とこれから一生を共にするかと思うと眩暈がした。しかも、生まれてきた子どもが男子だったので、その子が彼の嫡子として彼の公爵という称号を受け継ぐのだ。それだけは絶対に避けなければならない。

彼の話を聞きながら、彼女は人間で言つと首を傾げるよつた動作をする。

まったくもつて、人間というのはなんて面倒臭い生き物なのだろう。「名誉」だとか「爵位」だとか、そんなものが生きていく上でなんの役に立つか彼女には理解できない。お腹の足しにもならない事でこれほどに悩めるのが人間だというのは知つているが、毎度

の事ながらそう思つ。

それでも彼女が身じろぎせず彼の話を聞いているのは、『人間でない貴女だから、打ち明けられる話があるのよ』と笑う主人の言葉があるからだ。

人間はとてもややこしい生き物だから、彼らよりは単純な生き方をしているこちらが手を貸してあげた方がいい時があると、彼女は経験からよく知つていた。

黙つて話を聞いて抱き締めさせてあげれば、少しばかり気持ちが戻る。彼女の主人はいつもそうしている。そしてそれは彼にも有効であつたらしい。しばらくそうしていた後、彼はまだ浮かないがまだマシな顔でふわりと微笑んで彼女から身体を離した。

「お前は本当にいい子だな。まるでこちらの気持ちがわかっているみたいだ。このまま連れて帰りたいよ」

それはご免こうむる。

彼の腕の中は気持ち良かつたが、彼女にはそれ以上に心地よい人の存在があるのだ。

「…冗談だよ」

立ちあがつて誇りを払うと、最後にもう一回、名残惜しげに頭を撫でると彼は庭から立ち去つて行つた。

「あらリラ。お帰りなさい」

主人の部屋に行くと、彼女の大好きな主人が満面の笑顔で迎えてくれた。

彼女のベッドに足をかけて、頬を一舐めすると、くすぐったそうな笑い声をたてながら主人は彼女を抱きしめる。

それから「あら」と咳きながら彼女の身体を優しく撫でて問いかける。

「誰かに甘えてきたの？薄情な子。それとも、甘えさせてあげたのかしら？」

残り香を付けて、一体誰とデートしてきたの?と微笑む姿は女神のよう。彼女は主人に身体をすりよせる。

「ふふ、いい匂い。お前の恋人はとても素敵な人みたいね」

主人はそう言うが、彼女にとつては主人以上にいい匂いのする人はいないし、いつだつて主人が一番である。

愛すべき主人のような人間がいる。主人のような人間ばかりではないけれど、その事実があるから彼女は人間という別の種族の生き物を心の底から愛している。だから手だつて差し伸べたくなる。今日の彼もいつか、彼女のように本当に愛すべき人間に出会えるといい。彼女をやさしく受け入れその背を撫でてくれた彼は、幸せになるにふさわしい人物なのだから。

そう願いながら、彼女は主人の膝にそつと寄り添つた。

## 第一章

その日、デイヴィッドはエルストン子爵邸の庭を歩いていた。この庭を歩くのは2回目だ。以前来た時はとてもなく不愉快な気分だったので、ろくに花も見られなかつた。

結婚直前に婚約者に裏切られて3年。あの時は本当に散々だつた。自分の親族と相手の家に事情を説明し、自分ではない男の子どもを宿した女との婚約を解消した。彼女は手ごわくて、最後まで彼の子どもだと張つていたが、それが嘘である事は彼が一番よく知つてゐる。名譽を重んじてそのまま結婚するよう進言もされたが、彼の潔癖さがそれを許さなかつた。

結局、浮氣相手である子爵家の三男と話をつけ、彼らを結婚させ本当の両親の元で子どもを産ませた。生まれた子が父親そつくりな男児である事を知つた時には、間違つた選択をしなかつたと心の底から安堵したものだ。

ただ、彼の評判はかなり落ちていて、彼はしばらく社交界から姿を消すことになつた。元々社交界もあまり好きではなかつたのちようどいいくらいだつた。3年経つた今でも評判は回復しきつたわけではないが、ささやかな揶揄や非難に耐えられるくらいには彼も強くなつたと思う。

今だつて、あの時別れ話をした庭を歩いていても辛くはならない。少し感傷的な気分になつても、それだけだ。

そういえば、と彼は以前この庭で会つた大きな犬を思い出す。あれはグレートピレーニーズだつた。あの時、彼は初めて自分の中の弱さを口に出した。幼いころから公爵家を継ぐ者として厳しく育てられた彼は、弱音を吐くことなど許されていなかつた。けれど、人間でないあの存在の前でなら何故か弱音を吐いてもいいと、あの時はそう思えたのだ。堂々とした美しい犬は、彼の傍にいて、おとなしく抱かれながら彼の話を聞いてくれた。犬がこちらの話を理解して

いるとは思わなかつたが、まるで慰めるかのように優しく身体を寄せてくれたあの存在に、束の間ではあれ大層心を癒された事は事実だつた。

整えられたライラックの茂みに目を細め、そつと手を伸ばすと、ガサガサという音がして、大きな影が姿を現した。

その影が紛れもなく彼の思い出の犬であると氣付いて、デイヴィッドは軽く目を見張ると、一気に破顔した。

「驚いた。まさか会えるとは思つていなかつたよ」

声をかけながら近づき、昔と同じように頭を撫でる。見上げてくるつぶらな瞳がまるで自分を覚えているかのようで、彼は嬉しくなる。

しゃがみ込んで、手を伸ばす。犬は黙つて彼に抱きしめられ、少し甘えるように身を寄せてくる。鼻を顔に寄せてきて、ペロリと舐められたのには驚いたが、不思議な事に嫌ではなかつた。

大きな白い身体に賢そうなアーモンド形の瞳。歩く姿はどこか威厳に溢れている。

犬がしている美しいエメラルド色の首輪に、エルストン子爵の趣味の良さが表れていた。勇敢で従順と尊高いこの犬種は貴族の間でも人気が高かく、人に吠える事もせず、かといって無暗に愛敬を振りまく事もしない。犬種としての特徴もあるが、飼い主に影響されたところが多そうだ。以前も思つたが、賢く人に慣れた犬だ。よく躰けられていると感心する。

「覚えている…わけはないか。お前は変わらないな。相変わらず賢くてやさしい犬だ」

覗き込んだ瞳が可愛らしくて、デイヴィッドはその場に座り込むと、この3年の事をその犬に話しかけた。犬は黙つて聞いている。

犬相手に真剣に話をしている自分に苦笑しつつ、デイヴィッドは久々に穏やかな時間を過ごしていた。

彼に寄り添つて座つていた犬が、ふと顔を上げた。立ち上がりつて一声吠える。

何が起こつたのか不思議に思いながら、デイヴィッドは犬が吠え尻尾を振つた先を視線で追つた。

水色のドレスを着た少女が、何かを探してきょろきょろと頭を動かしている。犬の鳴き声に視線を定めると、パタパタと一直線に走ってきた。

「リラ」

少女は犬を見て、素晴らしい晴れやかな笑顔を浮かべる。犬もそれに応えて彼女の方に走つていいくと、彼女を押し倒さないよう気をつけた勢いで飛びついた。

13・4歳だろうか。柔らかく波打つた栗色の髪を惜しげもなく垂らし、澄んだ緑色の瞳は生き生きと輝いている。少女らしくスラりとした身体つきはほつそりとして、柳の木を思わせた。華やかではないが上品な顔立ちに、人好きのする愛嬌のある表情を浮かべており、見る者を微笑ましくさせるものがある。

少女はデイヴィッドに気付くと、にっこりと笑つて犬を伴つて近づいてきた。いくら幼いとはいえない人間に簡単に近づくのは褒められた事ではない。まして貴族の娘なら尚更だ。彼女の所作の一つ一つには貴族の娘である事を窺わせる育ちの良さが表れていた。おそらくエルストン子爵の娘であろう。確かに社交界にデビューしていないうえ娘がいたはずだ。

「はじめまして。えーっと…？」

可愛らしく小首を傾げる姿に、デイヴィッドは思わず頬を緩める。丁寧な礼をして、細く白い彼女の手を取る。

「はじめまして、姫君。ローランド公爵、デイヴィッド・エリック・フォントンと申します」

社交が好きでなく、堅苦しい彼にしては実に珍しく、少しおどけて挨拶をすると、少女が目を丸くした。その少女は一瞬置いて、クスクスと楽しそうな笑い声をあげて優雅に礼を返す。

「はじめまして、公爵さま。エルストン子爵の娘、マーガレット・リースエルよ。こちらはリラ。私の親友」

そう言って、隣に佇む犬を見下ろす。幼いながら慈愛に富んだ視線に、デイヴィッドは心が温かくなるのを感じた。

「親友ですか？」

「そう、親友。私が嬉しい時、悲しい時、いつでも一緒にいて私と気持ちをわけあってくれるの」

当然のように少女 ミス・リースエルが言う。しかしその瞳の奥では自分の言葉に対する彼の反応を窺っている色があった。

犬は古来より人間の友であるが、獣くささを嫌う令嬢は少なくな。年頃の娘が好みそうな小さな愛玩犬ではなく、大型犬を愛し堂々と『親友』と呼ぶ彼女の率直さは珍しいものであった。犬がこちらの気持ちをわかっているという彼女の持論が眞実かどうかデイヴィッドは知らないが、この賢い犬に敬意を払いたくなつてデイヴィッドは鷹揚に頷いた。

「素晴らしい親友をお持ちですね、ミス・リースエル」

ほほ笑みながらそう告げると、令嬢は驚きながらも實に嬉しそうに笑つた。白い頬が興奮に紅く上氣して、活き活きとした美しさを際立たせている。

「ありがとう！ふふ、そう言つてもられて嬉しいわ。ねえ、リラ？」少女が傍らの犬に問いかけると、リラと呼ばれたその犬は少女を見上げ甘えるように尻尾を振つた。所作がどこか人間くさくてディヴィッドは内心愉快でたまらない。

「あなたのリラはとても賢いのですね。本当にこちらの気持ちをわかっているかのようだ。そのような親友がいるとは、貴女は幸せですね」

3年前の一時を思い出しながら彼が言つと、ミス・リースエルは再び彼に向つて顔を上げ、首を傾げる。傍らのリラを見下ろしてから、今度は彼をじっと見あげる。

「…あの、勘違ひだつたらごめんなさい。もしかして公爵さまは以

前にもリラに会つた事がある?」

突然の質問にデイヴィッドが言葉を失くしていると、ミス・リースエルは少し気まずそうに言葉を続ける。

「なんとなくだけれど、そう感じたの。それに、貴方の使つてゐる香水に覚えがあるし…」

「私の?」

デイヴィッドの愛用してゐる香水は所有してゐるバラ園で作った特注品だ。そういうある香りではない。一体彼女はどこで彼の香りを覚えたというのだらう。

「ずっと前だけれど、リラが残り香をつけて庭から帰つてきた事があつたの。とてもいい香りだから覚えていて…間違いなければ、それが公爵さまの今の香りと同じなのよね。あ、不躾な質問だつたかしら?ごめんなさい」

申し訳なさそうな顔はしていても、それ以上に好奇心を前面に出した表情でミス・リースエルが告げる。これが妙齢の婦人ならともかく、まだ幼い彼女の台詞といつところにデイヴィッドは差して気分も害されずに得心した。

「いえ、お気になさらずに。そうですね…実は私も、何年か前に貴女の親友にお世話になつた事があるんですよ」

内緒話を打ち明けるかのようにあえて声を潜めて告げると、少女の顔がパッと明るくなつた。くるくると変わる表情が見ていてとても初々しい。ミス・リースエルは朝咲きの薔薇を思わせる瑞々しい笑顔を彼に向けた。

「じゃあ、公爵さまはリラのお友達ね!」

「そうですね…彼女がそう認めてくれるなら」

デイヴィッドが手を伸ばしてその頭を撫でると、リラは嬉しそうに目を細め彼の手を舐める。その様子を見て少女は更に笑みを深めた。

「十分認められてるわ。リラの人を見る目は確かだもの」

ミス・リースエルは飼い犬の傍にしゃがみこむと、慣れた手つき

でその首をかいてやる。珍しい、しかし微笑ましい雰囲気の彼女たちに、デイヴィッドはこの数年で一番心が和らぐのを感じていた。

「リラのお友達なら私のお友達よ。公爵さま、お時間があれば一緒にお茶はいかが？」

「きなりの、しかも異例の申し出に、デイヴィッドは驚いてまじまじと少女を見つめる。どこか型破りな子爵令嬢は、彼のそんな態度を気にした様子もなくにこにこと笑っていた。

彼女の教育係はさぞかし手を焼いている事だろう、と思いつつ、デイヴィッドは田じりの皺を深くする。奇妙な事に、彼女の提案に惹かれてやまない。

「光栄な申し出です、ミス・リースエル」

「マー哥と呼んで。デビュー前だし、私はまだ貴婦人ではないの。ねえ、いいでしょ？」

純粋に彼の同席を望む瞳に一切媚はない。久方ぶりに異性と心安らぐ時間を過ごせそうだ。もつとも、女性というにはあまりに幼すぎる姫ではあるけれど。

いざれにせよ、彼女の父親である子爵にも挨拶をしなければならない。すっかり同席するつもりではあるけれど、一応それまで返信は先延ばしにしておこう。

彼は期待に溢れる少女にただ微笑み返し、邸に戻るためにそつと手を差し伸べた。

マークは半ば呆れて、興奮に騒ぐ田の前の母と姉を見ていた。

今日の午後、我がエルストン子爵邸にローランド公爵が来ると知らせを受けてから俄かに母と姉は浮足立つてゐる。

ローランド公爵はここ数年社交界から離れていたが、今年はシーズンいつぱい参加するという。独身27歳、公爵という身分と財産、それから端正な顔立ちを兼ね備えた彼は社交界の女性全員にとつて憧れの存在なのだ。

しかしながら、まだデビューしておらず、しかも恋愛事にはまったく興味のないマーク」とマーガレット・リースエルには関係ない。だからどうしたのだ、とうくらの勢いである。母親には嘆かれているが、小さい頃は身体が弱くて全然外で遊べなかつた彼女は、丈夫になつた今、思う存分身体を動かして遊ぶ事がよほど重要なのである。

そういうわけで、今シーズン初めて彼が邸を訪れた時も末娘は客人の存在に我関せずと父親自慢の庭に愛犬のリラと遊びに繰り出していた。まさか、そこで尊の公爵に出会うとは思はずに：

「ねえ、お母様？ 公爵さまはどんな色のドレスがお好みかしり？」  
「そうねえ… 貴女の肌の色だと明るい色の方がいいけれど、公爵さまの雰囲気に合わせて寒色を選んでもいいわね。ほら、このブルーのドレスなんてどうかしら？」

彼のどこを見たら寒色のイメージが湧くのか疑問に思いながら、マークは部屋の片隅でドレス選びに熱心な母娘を見つめる。傍らではリラが優雅に伏して尻尾を揺らしていた。

「ちょっとマークーその犬を近づけないで頂戴。ドレスが汚れてしまつわ！」

「…リラはそんな事しないわよ」

そもそも立ち上がつてすらいないので、と反論するも、姉は聞く

耳をもたない。もともと体格のいいグレートピレーヌズのリラを母とこの2番目の姉は毛嫌いしているのだ。まったく失礼もいいところである。

確かに本来なら室外犬として扱われるべきかもしれない犬種だが、気性は非常に穏やかだ。毛並みだって、多少毛の抜け落ちは激しいかもしだれないがマークの献身的な世話を実に滑らかでうつくしい。アーモンド形の黒い瞳は実際に理知的で素晴らしい。そんなりラを邪険にするなんてどうかしている。

「氷の貴公子と名高いローランド公爵さまとお会いするのに、少しでもみつともない格好はできないのよ。彼はとっても評価が厳しいんだからー。」

「はあ…」

『氷の貴公子』ってなんだろう…。

マークは返事をしながらも心の中で首を傾げる。ここ最近気がついた事なのだが、どうも母や姉の評価と自分が知っている公爵像が一致しないのだ。

いざれにせよ、ここに長くいる事は賢明ではないだらう。マークは立ち上がりにつっこりと母と姉に笑つて見せた。

「お姉さまたちは忙しそうだから、私はもう退散するわね。リラ、いらっしゃい」

厄介ものを見る目つきには耐えられない。彼女の大事なリラを嫌う彼女たちには本当に腹が立つ。

でも、残念ながら公爵さまはリラのお友達でリラの事が大好きなのよ、と。マークはあえて姉たちに告げる事なくさつさと部屋を後にした。

マークが庭で初めてローランド公爵と会つて以来、彼はちょこちよことエルストン子爵邸を訪れるようになった。

注目の独身男性が特定の家に頻繁に訪れる理由と言えば一つ。お

目当ての令嬢がいるからだと世間は考える。エルストン子爵には3人の娘がいて、長女は既に嫁いでいるが、次女は社交界2シーザン目の花ざかりである。それゆえに、母も当の次女も公爵に少しでもいいところを見せようと必死なのだ。

だが、しかし。

「貴方の目当てがリラだと知つたら、お母様たちどうするのかしらねえ…」

「どうもしなくていいんじゃないか？」

バスケットからいそいそとカボチャのパイを取り出しながら答えるのは、噂の公爵デイヴィッド・エリック・フォントンその人である。一緒に入つていた林檎を取り出すと、入つっていたフルーツナイフで半分にしてからリラに与えた。

「私がここに来ているのは君とリラ、2人と過ごすためで、君の姉上に求婚する気はない。実際、ここに来たつて彼女たちの相手はほとんどしていないし」

口で言つほど簡単な問題ではない事はデイヴィッド自身がよく知つてゐるくせに、あつさりとそんな事を言つ。周囲に子爵令嬢に求婚しているという噂が立とうが何だらうが彼女とリラを切り離すつもりはないであろう口ぶりがマーゴには嬉しかった。

マーゴと同じようにリラを大切にして友人として接してくれる彼は、彼女にとつて貴重な友人の一人だ。リラは一見身体が大きくて怖そだから、倦厭する人が多い。本当はとても優しくて賢くて、こんな素晴らしい犬は人にもいないと思うのに。この公爵だつて、リラのそんな優しさに助けられた一人なのである。

眩い純色の金の髪に綺麗なアイスブルーの瞳。スッと通つた鼻筋にまるでギリシア彫刻のように素晴らしい整つた顔立ち。深緑の上着も、洒落た結びをしたクラヴァットも嫌味なくらい決まつていて、距離を置きたくなるほどの美貌をもつてゐるのだが、醸しだす大らかな雰囲気がそれを相殺している。

これのどこが『氷の貴公子』なのだろう。

柔らかく微笑む姿も寛ぎきつた表情も楽しそうな会話も、どこをとっても彼の通り名にそぐわない。社交界という人たちは浮かれすぎて頭につじが湧いているのかと思ってしまう。

その疑問を率直に聞いたら、デイヴィッドはしかめ面をして、普段はこんなに表情豊かではないのだと白状をした。それが信じられずマークが驚いた顔をすると、パイを口にしながら説明を続ける。「嫌なんだよ、ああいう社交の場が。だからどうしても無愛想になる」

「……だつたら出なければいいじゃない」

「私だつて出たくない。けれど、礼儀つていうものがあるからね。今までにはちょっと事情があつて離れていたけれど、そろそろ妻を探せつて親族からも圧力をかけられたし。公爵つていう立場もある」

「……」「愁傷様」

マークは詳しく知らないが、デイヴィッドが極端な女性不信である事は知っていた。結婚という言葉を毛嫌いしているのも知っている。どう見たつてマークより美人で女ざかりの姉を無視して彼女やリラと時間を過ごすのだって、彼の根深い女性不信が原因である。

「まったく、冗談じゃない。結婚なんてしたくないというのに」

マークはメイドが用意してくれた紅茶を手際よく注ぐと、悪態をついているデイヴィッドに手渡す。満足そうにそれを啜り懶痴を溢す公爵は、まったくもって紳士らしくないが、だからこそマークは好きだ。儀礼的な形だけのものは自分たちに似合わない。

「マークやリラとこうやってお茶をしているのが一番好きだ」

さりとて言つてくれるのいいが、それはマークがおおよそ“女性”とはかけ離れていて、完全に恋愛対象外だからこそ出てくる言葉だろう。そう思つと少し複雑だ。

別にデイヴィッドに恋をしているわけではないけれど、いつも子供扱いされるのもおもしろくない。決してデビューしたいわけではないが、マークだつて3、4年後には社交界にデビューして大人の

仲間入りをするのに。

嫌味の一つでも言つてやるつかと傍らの“ディヴィッドを見やると、予想外な事にそこではいい大人がリラを抱きかかえるようにしてく一すかと眠つていた。

呆気にとられて寄り添う友人たちを見つめていると、リラがマーゴに向けて視線を流し、パタリと尻尾を動かした。どうやら寝かしておいてあげなさい、と言いたいらしい。

「まあ、しようがないか」

おそらく、彼が言うように“ディヴィッド”にとって彼女たちとの一時は数少ない穏やかな時間が過ごせる機会なのだろう。時折見せる暗い表情や、姉や母と共にいる時のすましきつた顔を思つと、心ない一言や態度で希少な機会を奪つてしまふ事は可哀そうに思えた。一回り年上のくせに、どこかほつとけない友人である。

リラの背を撫でながら、マー哥は自分の分のお茶に口をつけた。もう花も終わりのライラックが、深い色の葉を重ね、影をつくりながら、さわさわと耳心地良い音を立てていた。

その日の午後、エルストン子爵邸を訪れたデイヴィッドは、常に  
ないほど穏やかな笑顔を浮かべて邸の主に挨拶をした。

「こんにちは、エルストン子爵」

「やあ、ローランド。 3日ぶりだね」

エルストン子爵マークス・ジャン・リースエルはからかうように  
笑うと、客人にこやかに礼を返した。淡い金の髪に緑色の瞳、華  
はないが品のいい整った顔立ちをしていて、柳のような細い目がい  
かにも人を良く見せている。年は50代前半なのだが、がつちりと  
した身体つきのせいか見た目よりずっと若々しい。

デイヴィッドとエルストンは高祖父を同じとする遠い親戚にあた  
る。年こそ離れているものの、この一見温厚な、けれど実は一筋縄  
ではないか年上の子爵とは気が合つて小さい頃からよく相手をし  
てもらつたものだ。そしてそれはデイヴィッドが大人になってから  
更にその新密度を増したように思える。

「昨日の舞踏会は有意義に過ごしたかい？」

エルストンの問いにデイヴィッドは軽く肩をすくめる。

「ダンスはともかくカードは楽しめましたね。伯母上から大量の花  
嫁候補を紹介されなければ、もつと快適だったのですが」

由緒正しい公爵家の主が独身では決まりが悪い。デイヴィッドには男兄弟がないので、後継となる男子もできるだけ早くと望まれ  
ている。一度婚約破棄してから真剣に妻を探す気を全く起こしてい  
ない家長に、古傷を抉るように親戚たちは嫌味を重ね花嫁候補たち  
を紹介していく。

今や社交界一の「結婚したい男」として知られているデイヴィッ  
ドなので、花嫁候補は底をつかない。

「それはそれは。ダンスホールの一番奥にいても入口にまで花嫁候  
補が並んでしまうな」

「勘弁してくださいよ。結婚なんて冗談じゃない。本当は今年だって社交界に顔を出す気はなかつたのに、伯母や祖母に泣かれて仕方なくロンドンに来たんですよ、僕は」

玲瓏とした美貌と洗練された身のこなしからロンドン一魅力的な紳士と名高い『ディヴィッシュ』だが、本来の性格は生真面目で飾り気がなく、カードやビリヤードより領地でのんびり過ごしている方が性に合っている。

女性たちに素気ないのも、紳士たちの刹那的な享楽を共にしながらどこか冷やかなのも、すべては興味がない故の事。それが彼の完璧な外見から変な方向に転じ、一部では『氷の貴公子』と謳われ崇拜されているのだからいい迷惑な事この上ない。

「それでは、私にとつては幸運なのかな。うちのヒーラーが君にキャロラインを嫁がせようと躍起なんだ」

「…勘弁してください」

心底嫌そうに頭を振る『ディヴィッシュ』に、エルストンは屈託なく笑う。その様子から察するに、彼の妻が2番目の娘を公爵に嫁がせようとしているのは事実だが、彼自身はそこまでこだわりがないようだ。

そうでなければ、こう何度も訪問しているのに婚約の話を出してこない訳がない。

しかもエルストンは『ディヴィッシュ』がここに来ている真の理由を薄々察していく、こつそり奥方やキャロラインの目を盗んで彼をご自慢の庭園へと案内してくれるのだ。

今日も女性陣への挨拶を飛ばして庭園へ続く回廊を歩きだすエルストンに、『ディヴィッシュ』は思わず笑みをこぼした。

「キャロライン嬢がどうというわけではないんですが、同じ女性ならこつそりラをくださいませんかね」

リラ。

確かに女性の名前だが、その実はグレートピレニーズという大型犬だ。よほど躾が良いらしく、人に吠える事も噛む事もしないで素

直に抱かれてくれる。かなり賢い犬で、その毛並みは滑らかでいつも触っていたくなる手触り、瞳は純粋で穏やかでこちらを見透かしたかのようなその光は知らず心を癒してくれるのだ。

「リラに会えた事は今年一番の収穫だと思っているんですよ」

半ば本音でそう言つと、エルストンは苦笑しつつ振り返る。

「確かに、君が彼女に会つためにこんなに熱心に通つようになるとは思つていなかつたよ。でも彼女は駄目だよ。リラを君に渡したりしたら、私は一生マー『ゴから恨まれてしまうから」

「はは、確かに。それ以前に、リラの方がマー『ゴから離れてくれるかどうか。彼女のマー『ゴへの忠誠心は絶対ですから」

苦笑交じりに告げる言葉は真実で、子爵の末娘とその飼い犬の絆は人間同士に芽生えるものより遙かに重く感じられる。賢いグレートピレニーズは幼い頃病弱だつたという末娘にとつて唯一の遊び相手であつたようで、互いに掛け替えのない存在なのだ。

そんな事を思案していると、エルストンがさりげなくけれど明らかに意図している絶妙な間でふと独り言のように呴いた。

「まあ、マー『ゴを娶れば、特典としてリラも付いてくるがね」「予想もしない話の展開に、デイヴィッドは思わず噴き出した。

いつもと同じ庭園の、いつもと同じ場所で親友の毛並みを撫でていた少女は、いつもと違う様子で来訪した友人に片眉を上げた。

「どうしたの、ヴィット？なんだか、いつも増して様子が変だわ」「…マー『ゴ、それは心配しているのか貶されているのかよくわからぬいよ」

「そう？でも減らず口が叩けるようなら大丈夫ね」

口に細い指をあててくすくすと笑う。そんなマー『ゴの姿は幼いながらも可憐で、デイヴィッドは今まで考えもしなかつた将来案に頭を悩ませる。最近はマー『ゴも自分を『ヴィット』と愛称で呼ぶようになり、ますます親しくなつたところだつたのに、妙な考えを植え

付けられてしまつた。

まさかエルストン子爵の思惑が彼の次女ではなく三女にあつたなど、どうして考えられよう。マークはまだ社交界にデビューまで4年もあるのだ。幼女とまではいかないが、年端もいかぬ少女に対して一体自分に何を考えるというのだろうあの人は。

いやしかし、と。溜息を吐きながらもディヴィッドは改めて友人である子爵家の末娘を見る。

こちらを訝しげに見つめる瞳はエメラルドのような澄んだ緑色で、モスリン地のチョコレート色のドレスがほつそりとした身体を包んでいる。防寒用かクリーム色のショールを羽織り、栗色の豊かな髪は相変わらず纏められもせずふわふわと背中に流れていた。特別美人というわけではないが、上品で可愛らしい顔立ちに、誰からも愛されるような輝きをもつた表情が浮かんでいる。数年もすれば周りの者を魅了する美しさを持つのは疑いようがない。

人柄もいい。他の貴族の娘のように作法や仕来りを気にしすぎる事もなく、ドレスや化粧、家柄の自慢等のくだらない会話を振りかざす事もない。自然を愛し、親友である犬を愛し、ありのままをありのままの姿で受け止められる寛容さを幼いながらも持つており、実に魅力的な性格をしている。ディヴィッドが飾り気なく素のままで接する事のできる数少ない人物である事は確かだ。婚約者に裏切られて以来、女性に対して不信感を募らせてているディヴィッドだが、マークなら大丈夫だという確かな信頼をこの数ヶ月の間で互いの間に築き上げていた。

家柄も公爵である自分からすればやや見劣りするが、れつきとした子爵家の令嬢だ。しかもエルストン子爵家は財産なら並みの伯爵家にも劣らない。年の差も離れてはいるが貴族の結婚としては13歳差なら許容範囲内だろう。

ディヴィッドとしては認めたくないのだが、考えば考えるほど、目の前の少女が自分にとつて一番理想的な花嫁像である事に気付かされる。

結婚に対する拒否的だが、どうしてもしなければならないのなら、相手はマー「ゴ」のような女性がいいとそう思つてしまつ。問題があるとすれば…

「ヴィッシュド？」

「…」

「…ねえ、ヴィッシュドつてば」

「…」

「…リラ、やつてちょうだい」

主人の命を受けたリラが、呆然と思惑を巡らせていくディヴィッシュに押し掛かつて尻もちをつかせる。そして止める間もない鮮やかでその顔をベロッと大きく舐めた。

「わつ。リラ、びっくりさせるなよ」

「ヴィッシュドが反応してくれないからよ」

そう、憤然としてマー「ゴ」が告げると、ディヴィッシュは素直に謝罪する。しかしやはり彼女の顔を見つめるのを止められず、マー「ゴ」の顔はますます不可解なものを見る目つきになつた。

その表情はとても幼くて、こんな少女に大人の事情を顧みようとした自分が汚らわしく思えてディヴィッシュは反省する。

「ごめん。ちょっと色々考えさせる事があつてね」

「あらあら、お疲れさま。でもせつかくここに来たんだから、今くらいは全部忘れてのほほんと過ごしたら?、こつもそうしてこるじやない」

「…」と笑うマー「ゴ」が可愛らしくて、ディヴィッシュはつられて笑う。

手を伸ばしてリラの頭を撫でると、リラは心地よさを心地よさめ、マー「ゴ」はそれを嬉しそうに見ていた。

気取る事のない彼女たちとの時間は、ディヴィッシュにとって何より安らげるもので、陽だまりの中にまどろんでいるような心地よさがある。中毒性もあるのか、一度味わってしまったらいつまでも浸っていたくなる空間だ。

もし彼女と結婚したのなら、数年後にはこの光景は当たり前のことなるのだろうか。

またもや脳内に浮かび上がってきたアイデアに、デイヴィッドは思案する。

2人の結婚に問題があるとすれば、まずは両者の気持ちだ。

本来なら貴族同士の結婚に本人の意思は重要ではない。あくまで家と家の繋がりであり、両家の意思が一致していればそれで良いのだ。しかし、もし彼がこの天真爛漫な少女と結婚するとするならば、その時にはきちんと彼女の意思が欲しい。

そしてもう一つの問題は、この天真爛漫で型破りな少女が、はたして貴族社会という堅苦しい世界の、それも公爵夫人という重圧に耐えられるかどうかだ。

「ねえ、マー『ゴ」

「なに？」

「君は、結婚についてどう思つてる？」

唐突なデイヴィッドの質問に、マー『ゴは大きな目をパチクリと瞬き、不思議そうに首を傾げる。

「突然なんで？ああ、また、誰かに結婚話でも勧められたのね。だから今日はちょっと様子が変なんじょ！」

実の姉も彼を夫候補として見ている事を知っている少女は、苦笑しながら彼の質問に対応する答えを考えているようだった。そんな彼女の隣でリラが座りながら首を回して主人を見ている。微笑ましい光景にデイヴィッドは目を細める。

「結婚…か。正直あまり考えていないわ。だって社交界デビューまだ4年もあるのよ？お母様は4年しかない！って言つていいけれど、やっぱりまだ4年も、だわ。遠い先の事よ」

呆れたように言つてから、マー『ゴは行儀悪く頬杖をついてリラの背を撫でる。

「誰かの奥さんになるなんて想像がつかないわ。もの凄く退屈そうだし」

実際に彼女らしい返答にデイヴィッドは笑みを浮かべながら彼女の傍に座る。幼い頃病弱だった反動か、良家の令嬢らしくなく外で遊ぶことが大好きなこの少女にとって、女主人として慎ましく生活しろところのは苦痛を伴う退屈さなのかもしれない。

そう考えれば、マーゴに公爵夫人という大役を任せるのはやはり無謀なのだろう。思わずため息を吐いてしまった彼をマーゴが振り返る。

「なあに？」

「いや、何でもないよ」

「やつぱり変よ、今日のデイヴィッド。無理やり縁談でも進められていたの？」

そうではないのだが、彼女に対して何といつていいのかわからず、デイヴィッドは曖昧にほほ笑む。気遣わしげな笑顔が申し訳なくて、思わずその小さな頭を撫でてしまった。

そんな彼をじっと見つめると、何を思いついたのかマーゴがいきなり手を伸ばしてデイヴィッドの首に抱きついてきた。

「…マーゴー？」

華奢な身体が彼にぴったりくっ付いており、首元に細い腕が巻きついている。小さな背中を覆うように流れる栗色の柔らかな髪。ライラックの香りがほのかに漂う。

驚きに身体を硬直させたデイヴィッドに対し、マーゴは本当に気遣わしげに彼を抱きしめ、耳元で呟く。

「…ヴィッドは大変ね。公爵だから責任も重たいし、結婚なんてしたくないくつて言つても逃れさせてももらえない。いつもいつも、大変なのよね。よくわからないけど、辛いのよね？…わかつてあげられないでごめんね。でも、傍にいるから」

泣きそうな小さな声に、デイヴィッドは思わず彼女の背中を撫でる。

傍らではリラもまた気遣わしげに彼の身体にすり寄っていた。

「小さい頃、寂しい時や辛い時はいつもリラがこうして傍にいてくれたの。私はずっとリラを抱きしめていて、そうしたらいつもこの間にか楽になつてた。だから今は、私がヴィッドにこうしてあげる」

その言葉に、ディヴィッドは3年前のリラとの出会いを思い出す。そういえば、彼女もずっと彼に抱かれてくれて、気がついたら心が軽くなつていた。そして、現在のマークの行動に納得すると同時に、なんだか少しだけ笑えてきました。

13歳も年下の少女に、自分は『慰めるべき存在』としてあやされているのだ。なんとも奇妙で、面映ゆく、けれど不快ではないのがまた不思議だつた。

腕の中にある小さな身体が思つた以上に柔らかい事に驚きながらも、ディヴィッドは離れないようしっかりと腕を回した。その力強さにマークは少し驚いたようだが、黙つて身体を預けてくる。

男女の駆け引きや艶めいた意味などない抱擁。しかしそこに含まれている優しさが、温かさが堪らなく愛おしくて、ディヴィッドはアイスブルーの瞳を堅く閉ざす。

離せない。

傍にいたい。

この腕の中の存在が、どうしようもなく愛しい。

自分の中の切なる想いを聞きながら、ディヴィッドは波打つ栗色の髪をゆっくりと手で梳いていく。

いつか、きっと。

彼女を本当の意味でこの腕に納めたい。いつも隣に、彼女とその親友を置き心地よい時間を当たり前にしたい。

腕の中の少女はきっと想像もしていない未来だろうけれど、彼としては何としてでも現実にしたい。それは夢を見るより切実な、胸

が焦げつくほど の憧憬の想いだつた。

そのためになら、どんな努力だつて惜しむものか。数年待つ事だつて厭いはしない。そうするだけの価値はあるのだから。

芽生えた想いと決意を胸に、デイヴィッドはライラックの香りを纏う乙女をもう一度しつかりと抱きしめ直した。

とある午後、いつもと同じエルストン子爵邸の庭の、いつもと同じライラックの木の茂る場所で、マー「ゴとリラはお茶を飲んでいた。日光の下に堂々と出て愛犬とお茶会をする時点で、マー「ゴは英國淑女の基準から大きく外れている。礼儀作法の授業を受けているのかといえば、今まさにさぼっている最中だ。

そんな彼女の事を母や姉が怒るのは仕方がないことで、それはマー「ゴも重々承知しているのだが、“礼儀作法”に対する嫌悪感と母や姉に対する反発心から、ついついあえて礼儀を無視したくなるのである。

「だいたい、意味がわからないのよね～…『やつらいつもだから』って言われたらそれまでなのはわかっているんだけど…なんでもんなに面倒のかしら」

ねえ？と隣に座る愛犬に小首を傾げながら問いかけて、葡萄を一房とる。行儀悪くぶつりと音を立てながら中身だけを吸い出して、木のふもとに掘られた小さな穴の中に皮を入れた。

「なんでその穴の中に皮を入れるんだい？」

いきなり影が差して声が降り注ぐ。マー「ゴがきょとんと見上げると、そこには見事なブロンドとアイスブルーの双眸をもつた美貌の主がいた。

「デイヴィッド」「デイヴィッド」

「やあ、こんちは。君たちはいつもここにいるんだな」

噂では『氷の貴公子』と呼ばれているらしい彼、ローランド公爵ことデイヴィッド・エリック・フォントンは、その呼び名に似つかわしくない温かな微笑みでマー「ゴとリラに笑いかける。

そしてマー「ゴに差し出された葡萄の房を受け取ると、「失礼」と声をかけてからリラを挟むようにして座りこむ。

最近よくお茶会に参加するようになった、この新たな客人のため

に、余分に用意していたカップを取り出してマークはお茶を注ぐ。

「ようこそ、ヴィッグ。はい、お茶をどうぞ」

「ありがとう」

カップを手渡しながら、にっこりと笑ってライラックの木を見やつた。

「小さいころからこの場所は私たちのお気に入りなの。ここは涼しいし過ごしやすいし、ちょっと庭園でも隠れた場所にあるから家の者にも見つかりにくいし」

エルストン子爵邸の庭はなかなか広大なので、こいつ小さな死角は多々ある。小さい頃こそ病弱で庭になど出ることもできなかつたマークだが、現在元気に走りまわっている今ならそのほとんどを把握しているといつてい。ただ、その中でも特にこじがお気に入りなのは、何よりこの傍らの木に理由があった。

「それにね、これはリラの木でしょ」

「…ああ、なるほど」

ライラックは、フランス名では「リラ」といづ。マークは知らないが、彼女の大事な親友は、リラの花が見事な庭をもつ家から引き取られてきたらしく、マークの父であるエルストン子爵がその花の名を付けたのだという。ちなみに、このライラックもリラが来た年に子爵が命じて植えさせたものだつた。

「だから特別なの」

「思い入れがあつて当然…か」

きちんと自分の気持ちをわかってくれた事を感じて、マークはにこりと年上の友人に微笑みかける。

まったくディヴィッグという人間は、リラに対して誠意をもつて接してくれたり、マークの事を馬鹿にしなかつたりとできた人間である。

「じゃあ、もちろん君は、花の中では一番ライラックが好きなんだ

ね

「もちろんよ！」

まひで眩しいものを見るかのよひに田を眇めて尋ねる「イヴィイツ  
ド」、マー、ゴは満面の笑みで肯定する。

「な、なぜ」れはお氣に附つてもらえるかな」

「可愛いー」  
デイヴィッドは懐を探ると、掌に収まるほどの小さな包みを2つ取り出す。興味深げにマークが見下ろす前で、するするとその包みを開けると、中からはリラの花を模した髪飾りとチャームが出てきた。

一四七

思わずホロリと口に出してから、マークは慌てて口を紡ぐ。すると、デイヴィッドはますます目を細めて、先にチャームの方を手にしてかざす。

ヒメラルドともよく似あうよりて銀で作つてもらつたし

そのまま大人しく座るリラの首輪にライラックのチャームを付ける。想像通り、とてもよく似合つていて、マーゴは少女らしく「うわあ」と目を輝かせる。

「え……でも……」

友人であるにせよ、異性から身につけるものをもらひのせいががなものか…と逡巡したマーゴー、デイヴィッドは問答無用で髪飾りをつけた。

「何を今さら。礼儀作法の授業をさぼる様なお嬢さんが気にすることかい?それに、私と君は遠縁とはいえ親戚なのだから、黙つて受け取つておきなさい」

ほら、可愛い。と微笑まれ、マークはしばらく戸惑う。けれど、やはりそこは女の子で、こんな素敵なお髪飾りが自分のものになる事に嬉しさを感じて、はにかみながらコクリと頷いた。

お礼を言いながら頬にキスをする。すると、主人の真似をしてリラも大きな体をデイヴィッドに預けながら顔を舐めた。

くすぐったいと笑いながら、ティイヴィッシュもまた実に楽しそうだ。「花の時期には本物と組み合わせても映えると思うよ。そういう風に注文したからね」

「え！？ これってもしかして特注！？」

再び慌てだすマークを、くすくす笑いながらティイヴィッシュは腕に閉じ込める。

「一度受け取つたものを返すのは無しだよ。返されても行く先がないしね」

「いや、それはそうかもしれないけど…」

髪飾りはともかく、首輪用のチャームはあまり行く先があるとはマークにも思えない。

じゃれ合う二人に、自分も混ぜるとばかりにリラが混ざつてきて、団子になりながら芝生の上に寝転がる。笑い声が広がって、大事な人たちの温もりが心を震わせる。

ああ、なんて幸せなんだろ？。

そう思いながら、マークはくすくすと笑い続け、もう一度ティイヴィッシュにお礼を言つとその頬にキスを落とした。

「キャロライン、ローランド公爵は諦めなさい」

まるで今日の天氣の話をするかのようなさり気なさで父親のマークスが姉に告げるのを聞き、エルストン子爵の三女マーゴは飲みかけていた紅茶のカップを宙で止めた。

ローランド公爵デイヴィッド・エリック・フォントンは今シリーズ（と言つからおそらく独身の間はずつと）社交界一結婚したい独身貴族で、遠縁ではあるがエルストン子爵家の親戚でもある。

以前はそれほど親しくもなかつたのだが、今年になつて彼は頻繁に子爵家を訪れており、距離間もずつと近くなつた。もっぱら主である父親かマーゴとその親友のリラに会いに来ているのだが、この絶好の機会を母と2シーズン目を迎えた姉が逃すわけがなく、隙を見つけてはデイヴィッドを捕まえて振り向かせようとしているのは確かだ。

彼自身はキャロラインがビーリヒより、結婚そのものに興味がない、だからこそマーゴやリラと過ごす事を好んでいるのだが、母や姉にとつてみたら知つた事ではないらしい。デイヴィッドとキャロラインが世間で噂になっているのをいいことに、他の令嬢に対して牽制したり、噂を事実にしようと躍起になつたりしている。

それでもなかなか靡かないデイヴィッドに、2人が苛立ち始めているのは知つていた。あぐく先日の家族でのピクニックでは彼が2人を全くに近いほど無視し、すべて友人に託してしまつた事に対しでは後の怒りようが凄まじかつた。ただ、デイヴィッドもそれだけ辟易しているという事だろう。そろそろ潮時である事は事実だ。

もつとも、マーゴには母と姉がそれで納得するとは思えなかつたが。

「どうしてのお父様！？」

「そうですわ貴方！公爵はきっとキャロラインに好意を持つてくれ

て いるに決まつています！ただ、少し変わつたお方だから素氣なく  
さ れて いるだけで、あれは照れ て いるのですわ！！

言 じ きる母 母親の理 論の破 天荒さに、マー ゴは思 わず 口元を引 き 缰  
ら せ る。少しう ひに らか、だいぶ無理やりする考 観 方だ。もし 社交  
界で 渡り合つてい くのにこれだけの勘 違い ぶりが必 須と 言 うのなら  
ば、マー ゴは間違 いなく 社交界では おぼれ死ぬだろ う。

マー ゴの 内心に 同意して か、傍 に 坐つて いた リラが パタリと 尾  
尾 を 揺ら し た。

「エ レーナ、キヤロライ ン。君たちも 本 当は わかつて いるんだろ う  
？ ど う 足 搭 いて も、公 爵、デイヴィッドが キヤロライ ンに 求婚して  
くる事 は あり 得ないよ。望みがない男 は 諦めて 他に 目を 向け なさい。  
オルレッド子 爵なんか、昨年から 気にして くれて いるで はないか」  
姉には 悪い が、父 母の 言葉 は 事実だ。ただ、マー ゴが 言え ば 角が  
立つ ので、彼女は あくまで 行儀よく 紅茶を 飲みながら 聞いて いる。  
しかし 本心では、父 母の 援護を したくて たまらなかつた。

「お父様は どうして 諦めろ なんて 仰るの？ 公 爵家との縁談 なんて こ  
んな 名誉な ことは ないわ。むしろ お父様が 勧めて くださるべき事な  
の に、ど うして そんな事を 仰るの……？」

キヤロライ ンの 泣ぐ 声を どこか 白けた 気分で 聞いて しまう 事は  
妹として 失格 かも しれない。やれやれ、と 隅には 気がつかれないよ  
うにマー ゴは こつそり 涼息を つく。

確かに、デイヴィッドが 姉と 結婚し 公 爵家と より 近い 縁戚にな  
れる ならば それは 非常に 名誉な 事だ。

けれど デイヴィッドが 女性 不信で 結婚を 嫌悪 して いるのは、友人  
で あり 愚痴の 聞き役 であるマー ゴと リラが 一番 良く 知つて いる。最  
近は ますます 憂い顔 になつて おり、友人 と して は 非常に 心配 して  
い るのだ。

だから 本当に、そろそろ 母と 姉には 諦め て ほしい のだ。結婚を 望む  
令嬢たちから 逃げ に 来て いる 親戚の 家で 結婚を 迫る ような 可哀そ  
うな 事 は しないで ほし い。

もしこれ以上姉たちの攻勢が激しくなつたら、この家に来なくなつてしまふかも知れない。

彼曰く、自分たちと過ごす間は気楽でいられるそうだし、マー哥とリラにとつても彼は大事な友人である。彼がこの家を訪れなくなつたら、まだ社交テレビしていない自分たちはなかなか彼に会えなくなつてしまふ。それがマー哥には嫌だつた。

「オルレッド子爵のどこが悪い？ 彼も十分男前だし何よりお前を好いてくれている。デイヴィッドはお前をただの遠縁としか思っていないし、彼と結婚してもお前が幸せになれるとは私には思えないのだよ」

「そんな、ひどい……！」

本格的に泣き出してしまつた姉に、マークスは眉を八の字にして困つた顔をする。ためざめと泣く姉の隣で、母親のエレーナが愛しい娘の背中を擦つて慰めていた。

そんな家族を少し離れたソファで見守るマー哥とリラは、いつまでも手つかずのまま放置されている3人のティーカップの中身を、勿体ないと思いながら一人黙々とお茶を飲んでいた。いろんな意味でお腹がいっぱいだとばかりリラ以外の誰にも言えないし、言つつもりもなかつた。

結局、決着のつかなかつた家族会議を終えた翌日。

マー哥は珍しく父親とリラと3人(?)でピクニックに出かけた。母と姉がいなのは、昨日からの氣まずさがまだ残つてゐるからだ。末娘では昔は体の弱かつたマー哥を、父は他の娘より可愛がつており、時折こうして一緒に出かける。また、そんな時もリラを忘れず大切に扱つてくれる父親をマー哥もまた慕つていた。

「マー哥は昨日の事、どう思つてる？」

「お父様の言つことが正しいと思つわ。これ以上お母様やお姉様たちが迫つたら、ヴィッドは発狂しちゃうわよ」

花畠を歩いている途中で不意に父親に聞かれて、マークはあの時思つた事を率直に答える。歯に衣を着せない娘の言葉を、子爵は特徴的な糸田をにこにこさせながら黙つて聞いていた。

マークは、母と2番田の姉が自分をあまり好いていない事を知っている。どちらかと言えば存在を気にしていないと言つた方が正しいかもしない。そのため、母と姉がいる場面では本心を出す事をしないが、父親だけの時は素直に意見を出す事についていた。

「やはりマークも私と同意見か。まあ、一番デイヴィッドに近いのは君たちだから、わかつてるのは当たり前かな」

そう言いながら、父娘の間を歩くリラの頭を撫でる。

「キヤロラインも本当はわかつてているんだろうけどね……」

溜息を吐きながら苦笑するマークは尋ねる。

「ヴィッドと結婚するのって、そんなに拘る事なのかしら。社交界の令嬢みんなの憧れだつていう事は聞いているけれど」

眉目秀麗、十分すぎる財産と国でも指折り数えられる名家の家長。どれを取つてもデイヴィッドが夫としての条件が最高級である事は知つてゐるが、社交界デビューもまだで、しかも世論と少し関心がずれているマークにはいまいち理解しきれないのも事実である。

世間ずれしていないうえ娘に、マークはさつきとは違つた種類の苦笑を浮かべて、マークの頭を軽く撫でる。ハメラルドのような澄んだ娘の瞳を見つめながら尋ねた。

「マークだつたら、どんな人と結婚したい？」

唐突な質問に、マークは可愛らしく首を傾げ、それからおもむろに隣を歩くりラを見る。大好きな親友と顔を合わせてにっこりと笑むと父親に視線を戻した。

「リラと一緒にお嫁に行かせてくれる人かしら。今みたいに邸内と一緒に暮らす事を許してくれる人なら一つ返事でお嫁に行くわ」

今度は違つた意味で世間からはずれた娘の言葉に、子爵はどうとう堪えきれず噴き出す。娘が唯一と言つていい友であるリラに執着しており、彼女と離れたくない事は知つていたが、まさか夫を探す第

一条件がリラだとまでは思つていなかつた。

そんな父親の胸中を半ば察して、マー「ゴは不貞腐れたように顔を背ける。

「いいじやない。だつて、本当にそれが一番で唯一の条件なんだから。それさえ許してくれるなら、どんなに退屈だつて堅苦しくたつて我慢するわよ。私はキャロライン姉さまのように美人でもなければ、メアリー・グレイお姉さまのようにお淑やかでもないもの。高望みはしちゃいけないの。わかつてゐるくせに、お父様の意地悪」

2番目の姉のキャロラインは社交界で一番ではないにしろ、かなり注目を集めの美人だ。金に近い褐色の髪はシャンデリアの光につも眩く光り、ドレスアップした姿は妹のマー「ゴから見ても美しい。長女のメアリー・グレイは容姿こそキャロラインに劣るもの、話上手の聞き上手で、優美で洗練された気品のある女性である。

出来の良い2人の姉がいる上に、マー「ゴは幼い頃体が弱かつた事もあつて母親からは散々自分に対する不満を聞かされてきた。誰かに嫁ぐなどまだ遠く先のようにしか思えないが、その時は高望みをするまいという事は、小さい時から決めてきた事だ。唯一の望みでさえ、自分にとつては分不相応な事かと思つ。けれどどうしてもこれだけは譲れないのだから仕方がない。

目標として歩いてた大きな木あと少し。残り少しの距離を小走りでたどり着くと、マー「ゴはぐるりとスカートを翻して父親の方を向いて微笑む。

「私とリラの事、一緒にもらつてくれるつていう奇特な殿方がいたらそれで大歓迎よ。20くらい年が離れていても気にしないわ。もちろん、素敵な人だつたらもつと嬉しいけれどね」

「何の話をしてるんですか、一体？」

突如割り込んできた声に、マー「ゴはびっくりして後ろを振り返る。すると、そこには外出用のジャケットをしっかり着たディヴィッドが穏やかにほほ笑んでいた。

「ヴィッグー？」

「やあ、マー『ン』。こんにちは、ヒルストン子爵」

「マークスで構わないと言つていいだろ?」

「いやかに答える父を見て、マー哥はデイヴィッドがここにいる事が彼の企みである事に気が付く。マークス・リースエルという人間は何かを企む事が大好きな人間なのだ。今回はまた嬉しく企みだし、教えてくれなかつた事にさしたる不満はないが、実の娘を引っかけるのは止めてほしいと時々思つ。

そんな娘の思惑など気にもせず、マークスはさつきまで父娘で話題にしていた事をデイヴィッドに話している。わざわざ他人に聞かせる話でもないどころか恥にもなりかねない話なので慌ててマー哥が止めようとするが、デイヴィッドが意外な事を口にした。

「なら、マー哥は私のところに来たらいいんじゃないかな?」

「……は?」

あまりにもさり気なさすぎるが中身は極めて重要なその言葉に、マー哥はピタリと動きを止める。

そんな彼女の様子に気が付いていたのに、デイヴィッドは我関せずと話を続けるのだから驚きだ。マークスが話を止めないのも幼い少女にはよくわからない。

デイヴィッドは過去に婚約者に裏切られてから、女性不信の上、結婚に対して嫌悪感を抱いているのではなかつただろうか。言いよる貴婦人たちを極度に冷徹な態度で追い払い、親族を始めとした年配の女性たちから持ち込まれる縁談に辟易して始終マー哥とリラに愚痴を言つていたはずだ。

それがどうしていきなり積極的に結婚を匂わせる発言ができるのかがマー哥にはわからない。それもまだ社交界デビューしていない少女相手に、だ。

「私なら、君がリラと一緒に来てくれる事は大歓迎だ。むしろ進んで一緒に来てほしいけど」

毒気なく笑う姿は彼の一いつ名である『氷の貴公子』を覆し、むしろ太陽のような眩さだ。

呆気にとられて口を開いたままの主人を心配してか、それとも自分の名が出た事に反応してか、リラがマー「ゴ」に身体を擦り寄せてきて、よつやくハツと我に返った。

「ヴィッシュ、熱もあるの？」

第一声をそう声かけてから、マー「ゴ」は小さな手を「トイヴィッシュ」の額に伸ばす。身長差がありすぎて、精一杯背伸びをしても額にこなぎりぎり指先が届いただけだが、どうやら熱はなさそうだ。

「ひどいな」

「だつて私はまだ14よ？ さつきの話だつてあくまで仮定だもの。本気にするなんておかしいわ。そりゃ、お嫁に行く時はリラも一緒つてところは譲れない事実ではあるけれど」

そういうながら、ディヴィッシュの額を軽く叩く。こんな親しい動作も、おそらく自分だから許されている事なのだとマー「ゴ」は知っているが、それも彼女がまだ社交界デビューを果たしていない14の少女だからなのだ。

そして、そんな少女にいきなり結婚の話をするディヴィッシュが甚だ性格が悪く思えてしまった。いくら尊敬しているからとこつても、そういうところはマー「カス」に似てほしくない。

そう告げると、ディヴィッシュは嘆き出し、マー「カス」は情けなさそうに眉を下げる。

「マー「ゴ」、それはひどくないかい？」

「そうかもね。でも好きよ、お父様」

につこうと笑って父親に近づくと、背伸びして頬にキスをする。それを嬉しそうに受け止めたマー「カス」は、笑いながら娘をギュッヒギュッと抱きしめた。

「私も好きだよ。可愛い私のお姫様」

そうして頬にキスを返すと、今度は真剣な顔つきでマー「ゴ」を覗き込んだ。

「ディヴィッシュがお前を本気で欲しいと言つても、可愛すぎて手放したくないんだよ。でも、彼以上にお前をお前らしくしてくれたる男

はいないとも思つてゐる。だから、許したんだ」

「……ちょっと待つて、お父様。それ、「冗談じゃないの？」

糸目からわざかに覗く自分と同じ色の瞳に、マークはよつやかに「へへへ」と話が冗談で流していいことではない事に気が付く。

慌ててデイヴィッドを振り返ると、慣れた手つきでリラの背を撫でていたデイヴィッドが、見た事もないくらい穏やかにほほ笑んでいた。そのどこか色氣がある表情に、不意に胸が鳴つてしまつたのは絶対秘密だ。

綺麗なアイスブルーの瞳を見つめたまま動げずにいるマークに対し、リラはマークの傍らをすり抜けてマークスと連れだってどこかへ行つてしまつた。

思いがけず2人きりにされて、マークはものすごく焦つていた。

デイヴィッドがゆっくりと近づいてきて、片膝をついてしゃがみこむと、形の良い綺麗な手を伸ばしてマークの頬にそっと触れた。彼が浮かべている今にも蕩けそうな甘い笑顔に、マークの心臓は押しつぶされそうなほど痛くなる。

「もちろん、今すぐではなく4年後か5年後か、君がデビューしてからの話になるけれど……私の妻になつてくれないかな、マーク。リラと一緒にうちにあいで。私は知つての通り女性不信だし結婚嫌いだけれど、君なら信じられる。ずっと一緒にいたいと思う。君と、リラとずっと一緒に過ごしたいんだ」

ゆつくりと、マークの心に言い聞かせるように、一言一言に心を込めてデイヴィッドが告げる。

「……私、キャロライン姉さまみたいに美人じゃないよ？」

「馬鹿な事を言わないでくれ。マークは可愛らしいし将来絶対美人になる。私が保証するよ」

「メアリー・グレイ姉さまみたいに気遣いのできる女性でもないし、お淑やかでもない」

「気遣いなら十分できている。私が落ち込んでいる時はいつも慰めてくれるし、私が心地よく過ごせるようにいつも工夫してくれている。お淑やかさんて求めてないさ。少々お転婆な方が君らしくて私は好きだ」

「お母様からは、いつもどうしようもない子って言われているの」「私にとつたら、どうしようもなく可愛らしくて素敵な子だ」

「公爵夫人なんて務められないわよ」

「まだ4年もある。それまで勉強すればいいし、私だって全力で君をフォローするよ。大丈夫だ。嫌だったら一緒に領地に引きこもつてもいい」

段々声を小さくしながら、おそるおそる尋ねるマークを、デイヴィッドがやさしく抱きしめる。

マークは父親以外にあまり抱きしめられた事がない。上の姉は出会えばいつもやさしくしてくれたけれど、物心ついた頃には嫁いでいてあまり実家には帰つてこなかつたのだ。体が弱く友人もいなかつた。だからマークはリラが絶対唯一でその温もりが欠かせなかつたのだ。

デイヴィッドは、彼ら以外で初めてマークを抱きしめてくれた友人になる。今までも何度かこうして抱きしめられる事はあつたが、彼の腕の中はいつも温かい。今までは彼が自分に興味を無くすまでの短い時間だけと思っていたが、もしかしたらこれから何回もこうやって抱きしめられる事になるのかもしれないと思うと、少し不思議な感じがする。

「リラと、一緒にいい？お邸の中でもリラと一緒に過ごさせてくれる？」

大きな背中を抱きしめて、ジャケットを強く握りしめながら問う。「トリと小さな頭を彼の肩にもたれかけた。

「一緒にいで。もちろんいつだって一緒に過ごしていい。

ただ、私がいる時は私も一緒に過ごさせてくれる事が条件だけれど」

茶目つ氣を出して付け加えられた言葉に、マークは思わず笑つて

しまう。その瞳が少し潤んでしまったところを、デイヴィッドに見られなくてよかつたと思う。ただ、口に出した声が少し掠れていた事には気がつかれてしまったかもしぬなかつた。

「お父様が、キャロライン姉さまにヴィッドを諦めなさいって言つた意味がわかつたわ」

「エルストン子爵：マークスはそんな事を言つたのか。まあ、確かにミス・キャロラインには諦めてもらつしかないんだけれどね」「私、姉さまに恨まれるわね」

「否定はできないな。どうにかして納得がいくだけのお相手を見つけてもらつて、早々に結婚してもらわないと」

心の底からうんざりとした様子で告げるデイヴィッドに、マークはくすぐすと笑う。

あの姉がそう簡単にデイヴィッドを諦めるとは思えないし、今日彼が告げた事を知つたら怒り狂う事は間違いないが、今ばかりはこの穏やかな幸せに浸らせてもらいたい。

恋するとか愛するとか、そういう気持ではないかもしれない。

けれどデイヴィッドは、父親とリラ以外に初めてマークをマークとして受け入れてくれた人物で、自分にとつては掛け替えのない人物の一人だ。

そんな大好きなデイヴィッドが、姉たちではなく、優雅な他の貴婦人たちでなく、マークをたつた一人として選んでくれた事が嬉しかつた。

「ねえマーク、プロポーズの返事を聞かせてほしいな」

やわらかく微笑みながらデイヴィッドが視線を合わせてくれる。

その表情は端正でとてもドキドキさせられたけれど、同時に何故か可愛らしくも思えて、マークは少しだけ意地悪をする事にした。

「一緒に嫁ぐ親友に相談しないといけないの。4年後までには答えを返せると思うわ」

最上級の笑顔で彼に微笑めば、デイヴィッドは愕然とした表情で彼女を見つめていた。

「… それはないんじやないか、マイ・デイア」

「あら、本人の意見は大切でしょ、う？」

「それはそうだけど…」

情けなさそうな顔に、マークは笑って頬に小さくキスを落とす。仲が良い友人として過ごしてきたけれど、キスをするのは初めてだ。ディヴィッドも一瞬驚いたが、すぐに笑って頬にキスを返してきだ。

今の自分たちでは世間的にも精神的にもこれが限界だろう。将来を考えているにはあまりに拙く幼い関係だけれど、たぶんこれが一番いい。

「来年には、ロンドンの家にも領地のハンプシャーにある邸にもラックを植えようと思つんだ」

思いついたように告げるディヴィッドは、悪だくみを打ち明ける子どものように楽しそうだ。

「君とリラの花だろ、う？」

そう言えば、以前何故広い庭園の中でもライラックの傍を好むのか告げた事があった。それを覚えていてくれた事に驚きながらも感心する。そしてその打ち明け話の素晴らしさに、マークは歓声を上げながら再びディヴィッドに抱きついた。歓喜のあまりもう一度ディヴィッドの頬にキスをする。

そして大好きな、おそらく将来の婚約者に笑顔で提案した。

「4年後にはそこでお茶会をしましうね、ヴィッド。ロンドンでも、ハンプシャーの邸でも。私と貴方と、リラと一緒に」

## 最終章（後書き）

…と、こうわけで完結です。

文章も拙い、設定もしつかりしていないこんなお話に付けて  
くださりありがとうございました。

なんとな〜く話ができるなんとな〜く書き進めていたら、いつの間にか6話も行ってしまったあたり、作者にも「あれ〜?」な作品でした（笑）が、最終的にはかなりキャラたちもお気に入りになりました。

なんの盛り上がりもなく、ただほのぼのとしているだけのお話ですが、それがまたこのキャラ達らしいと思います。本音を言えれば、もう少しディエヴィッシュの「氷の貴公子」的な部分を出してみたかったのですが、もしかしたらそれはまた別のお話で書くかもしれません。

その際はまたよろしくお願いします。

ちなみに、後一編、番外編があるので、それを載せて完結マークをしたいと思います^v^  
ではではわ^v^

## 番外編 伯爵の友人観察日記（前書き）

番外編です。

デイヴィッドの友人の伯爵さま視点です。

時期としては本編最終章の直前くらいかな。

「なあ、本当に俺が行つてもかまわないのか?」

「今さら何を言つてはいる。エルストン子爵は快く了承してくれたんだし、お前は申し込みを間髪入れず受け入れたじゃないか」

「まあ、それは事実だけれどね」

小窓から秋も近いロンドンの街並みを眺めていると、不意にポツリと真向かいに座つていた男が呟いた。

「それに、お前に来てもらわなければ私が困る」

「…は?」

「いや、なんでもない」

無愛想でも恐ろしくうつくしく、そのまま広間に飾りたくなるような友人の顔を、俺は首を傾げ見返した。

俺、ブリストルム伯爵フイリップ・ヴァルフレーは、友人であるローランド公爵にエルストン子爵家との日帰り旅行兼ピクニックに誘われた。現在子爵家を訪れ子爵とそのご家族をお迎えに来ているところである。

正式に言えば主として誘われたのは友人であるローランドで、俺はおまけのようなものだ。

ローランド公爵デイヴィッド・エリック・フォントンといえば、完璧なる美貌と英國でも屈指の名家の家長である社交界で最も注目されている男の一人。とある事情もあり、あまり社交の場が好きではないため、舞踏会に出ても踊る事は稀。話をしている最中も滅多に表情を動かす事はないが、それでも圧倒的な人気を誇っている。花嫁候補である貴婦人方に冷静を通り越して冷徹な態度をとり続けるその姿は『氷の貴公子』と称されていた。

確かに、時折ブリザードが吹いたんじやないかつてくらい冷たい態度を取る男なので、この評価は実に真っ当なものと言えよう。そ

れでも令嬢たちは諦めないのだから俺はそちらの方がすごいと思う。そんなローランドが、最近エルストン子爵家に頻繁に出入りしており子爵家の令嬢との恋仲を噂されている。ローランド自身は否定しているし、俺も正直信じられないのだが、お相手であるキャロライン嬢は友人方に2人の仲をほのめかしているらしい。

2人の言い分のどちらが正しいか。ローランドがキャロライン嬢を公的な場で特別扱いしていない事から、彼の話の方が信憑性は高いが、万が一の可能性としてローランドの照れ隠しというのも否定できない。噂の真否は今社交界で注目の話題だ。

そんな中で降つてわいたこのピクニックのお誘い。これは噂の真否を確認する絶好の機会だと、俺は意気込んで二つ返事で受けたわけだ。

邸に入ると、主であるエルストン子爵が人の良い笑みを浮かべて俺たちを歓迎してくれた。元々ローランドとは遠い親戚にあたるそうだが、親しげな様子に彼が相当この家を訪れているのは間違いないと思わせた。

「デイヴィッド、それにブリストルム伯爵も。よく来ててくれたね」「今日は、身内での日帰り旅行に誘つていただきありがとうございます」

「畏まらないでくれ。遠縁だが、今でも君と私は親戚だ。だから今日は我が家の親愛なる一員として過ごしてほしい。君もだよ、ブリストルム伯爵」

「ありがとうございます」

俺はにっこり笑つて挨拶をしながら、目の前の子爵を気がつかれないよう観察した。

このエルストン子爵をローランドは心底敬愛しているといつ。しかし見るからに人の良さそうなこの中年紳士、見た目を裏切つて実はかなり喰わせ者だ。先ほどの会話の中でローランドのファーストネームを呼んだり、『今でも』という思わせぶりな言葉を使つたりする点からもそれは明らかである。

おそらく本格的にローランドを娘の夫として迎え入れる気なのだろう。尊敬している親戚からの言葉を、この友人はどう思っているのか。少なくとも、過去似たような態度を取ってきた貴族たちに対して、ローランドは徹底して冷たい態度を取ってきた。

そんな事を思い出しながら隣の友人を見た俺は、目の端に映つた光景に目を剥いた。

衝撃の大きさに、思わずこの光景を脳裏から焼き消せないものかと真剣に思う。

友人としてもうかれこれ10年以上付き合っているが、ローランドがはにかむように笑う姿など見た事がない。

嘘だ……これは幻だ……誰か冗談だと言ってくれ……

脳内で激しく葛藤しながらも、やはり子爵令嬢との縁談は事実なのかと唸つた。ローランドが子爵を尊敬していたとしても、あの言葉でこれほどの反応を示すとは思えない。やはり今後より近い親戚になる予定があるからの表情ではないかと思う。

しかし、だ。

俺にはどうにも納得がいかなかつた。

子爵家の一番目の娘であるミス・キャロラインは確かに美しい。金褐色の巻き毛も緑の瞳もほつそりとした、けれどメリハリのある身体つきも女性として非常に魅力的だ。だが、他に特筆すべきところはなく、あくまでそれだけの女性のように思える。他の大勢の貴婦人方と何の変わりもない。伯爵以上の爵位をもち彼女以上に美貌に長けた娘も社交界にはいる。それなのに何故ミス・キャロラインがローランドの目に適つたのか全くもつてわからないのだ。

「…プリストルム？」

訝しげな視線を受けて、俺はハツと友人に目を移した。

先程の笑顔はどこへやら、すっかりいつもの無愛想に戻つている。

「いや、今日のミス・キャロラインはさぞかし美しいんだろうなと思つてね」

少し考えてから冗談めかすように肩を竦めながら返す。

男の自分から見ても実に魅惑的なこの友人に、少しでも可憐に美しく見られようと必死になる令嬢が必死になるのは間違いがないだろ？

「…ああ、なるほど」

ところが、予想外に無反応であるローランドに、俺は思わずきよとんとした。

それが将来婚約する令嬢に対する反応か？

男であれば、女性が自分のために着飾つてくれるのは嬉しい事だろ？。それが好意をもつた女性なら尚更だ。それなのにこの関心のなさはなんだろう。

半ば呆然としている俺を尻目に、子爵が「そうだね」とのほほんとした様子で返答する。

「キャロラインもエレーナもピクニックを提案した一昨日からずっと今日の服装について悩んでいたから、相当着飾つてくるに違いないな」

にっこりとローランドに向けて笑った瞬間、彼の端正なる柳眉の間に皺が寄つた。

「冗談じゃないと言つた風情は最初に子爵に対して見せた表情と随分異なる。そんな失礼な態度をとつていいのか？そんな岩のような表情では子爵令嬢にも子爵にも、あまりいい感情は引き起こさないだろう。

恐る恐る子爵の表情を窺うと、これまで予想に反して子爵はにこにこと楽しそうに笑っていて、俺は完全によくわからなくなつた。  
一体何がどうなつてんだか…。ていうか、キャロライン嬢と結婚するんじゃないのか、こいつは？

事実と推察がかみ合わず、ちぐはぐな現状に大いに振り回されていると、一階のドアが開いて、小柄な二つの影が姿を見せる。

子爵夫人と噂のキャロライン嬢かと思って顔を上げたが、そこにはまだ社交界デビューをしていないであろう少女だ。その隣には大きな白い犬が彼女に寄り添うようにつき従つている。

そう言えれば、子爵にはあと一人娘がいたはずだ。この少女がおそらくそななのだろう。

ほつそりとした身体の少女は、淑やかさを無視して駆け降りるようにして階段を降りてくる。黄色いデイドレスが翻り、きつちり纏められていた濃い栗色の髪がその勢いで少しほつれた。

「いらっしゃい、ヴィツド！」

もうすぐ階段を降り切るといったところで少女が元気よくそう挨拶する。その元気の良さにもびっくりしたが、それ以上に飛び出した名前にびっくりした。

彼女が読んだのはローランドの愛称だろうか。親戚だからかもしれないが、俺の知っている限り、彼は従姉妹にあたる婦人たちにもきちんと名前で呼ばせている。愛称だなんてとんでもない。

驚いて友人を見て おそらくコレが本日最大の衝撃だ。頭がくらくらしてきた。

友人は…『氷の貴公子』と名高い友人は…満面の笑顔を彼女に対して向けていたのだ！

満面の笑顔だ、満面の！

まだ彼がここまで捻くれる前の、寄宿学校時代にだつて、こんな笑顔を見たことがないくらい、ローランドはとても嬉しそうにその少女に微笑みかけている。

「マーゴ、リラ」

あまつさえ自分から歩み寄つて、階段を降りる少女に手を差し出しているのだから驚きだ。

儀礼的でない限り、彼はけして自ら進んで女性をエスコートするということをしない。貴婦人たちから非常に羨ましい好意的な、あげくは煽情の瞳を向けられても彼はそうする義務がなければけして動かないのだ。自分から動くのはせいぜい親族の女性くらいだろう。

それがなんとまあ、この幼い少女にはサービスが良い。日頃のサービス精神を100集めてもまだ足りないくらいの歓待を彼女は受けている。

あげくに。

「そのドレスは初めて見る。よく似合っているな。ミモザの妖精のようだ」

ちょっと待て――

ローランド、お前女性を褒めたのか！？いつもなら社交辞令さえろくに言わない男だろうが――なんだその砂を吐きそうな甘い台詞は――！

そんな俺の当惑をよそに、本人たちは仲睦まじそうに会話をしている。妖精と褒められたせいか、少女の頬は少し赤いが、会話が続けられないレベルではなさそうだ。素晴らしい。これが舞踏会でローランドに焦がれているお姫様なら顔から火を吹いて卒倒している事だろう。

年の差があるため一見仲の良い兄妹のようなのだが、言いきるには違和感がある雰囲気だ。

「今日は髪も結っているんだな。珍しい。大人びて見えて別人みたいだ」

ローランドがほほ笑みながら、少しほつれてしまつた彼女の髪を整える。左手は以前彼女の手をもつたままだ。マーゴと呼ばれた少女はそれを照れる事もなく受け止め、自分より随分長身のディヴィッドに可愛らしい笑顔でお礼を言つていた。

「しようがないでしょ。今日はお庭にいるのとは違うのだもの。でも、髪を結つたくらいでは大人になんてならないわ。お世辞を言つても喜ばないわよ」

少女はくすくすと笑いながら、エスコートしていたローランドの手からするりと抜ける。

それから俺の方を向きニコッとはほ笑んだ。近寄つて来る彼女に向こうで、離された手を宙に余しながら名残惜しげに少女の背を見つめるローランドが見える。

なんなんだ、その切なげな表情は。お前そんな表情できたのか。思わず口元を引き攣らせる。

離れてしまつた主人の代わりか、彼女の犬がディヴィッドに近づいて鼻を寄せていた。どう見ても慰められている。天下のローランド公爵が犬に慰められている。どんな夢だこれは。

「はじめまして。ブリストルム伯爵さまですかね？マーガレットと申します」

「末娘だ。14歳になる。見ての通りおてんばでね」

ふんわりとしたスカートの裾をつまんで可愛らしく挨拶するマーガレットに、父親であるエルストン子爵が苦笑する。

もう、と拗ねたように頬を膨らます彼女の仕草は可愛らしいが幼い。

「ブリストルム伯爵フイリップ・ヴァルフレーです。ご機嫌つるわしうミス・リースエル。今日は招いていただきありがとうございます」

「私ではなくてお父様が、だけれどね。ヴィルヘルム・ローランド公爵と並んで名高い伯爵さまをご招待できる事はお母様もお姉さまも喜んでいらっしゃったわ。2人ももう少ししたら参りますのしばしお待ちください。えつと、その間にリラを紹介させていただきます。私の親友なんですね」

閑達な物言いは14という若さもあるが生来の要素が強いに違いない。まだ洗練されきっていない言動は潑刺とした少年のようだ、淑女とは程遠いが、思わず口の端を上げてしまうような微笑までがあつた。

紹介するといった『リラ』とは、あの白い犬の事だろうか。マーガレット嬢が振り向いて名前を呼ぶと、犬はローランドとともにこちらに歩いてきて、主人の隣に並ぶ。

毛並みの素晴らしい大きな犬で、アーモンド形の賢そうな瞳が印象的だ。気性が大人しいのは見て分かるが、首輪だけしてリードも付けられていないのは珍しかつた。そもそも、こんな少女がこれほどの大型犬を好む事から珍しいが。

「これはまた、見事な犬ですね」

俺の言葉に、マー・ガレット嬢が一瞬片眉を上げる。何か不快だつたのだろうか。それに気づいて謝るうとする前に、横からローランドが素早く口を挟んだ。

「リラは確かに素晴らしいけれど、マー・ゴの大切な親友だ。犬と言う一括りで締めてほしくないなプリストルム。もつとも、君に悪気がないのはわかっているけれど」

穏やかだが確實に俺を諫めるローランドの言葉に、俺は今度こそ開いた口が塞がらなかつた。やばい。わずか四半刻で一生顎が外れてしまま戻らなくなりそうだ。

かばつてゐる。

あの『氷の貴公子』が淑女と呼べない年齢の少女をかばつてゐる。マー・ガレット嬢はそんなローランドを嬉しそうに見上げてゐるが、驚いた様子は皆無である。つまり、彼女にとつておそらくコレは当たり前の光景なのだ。

あ、ありえない……

絶対絶対ありえない……  
お前そんなに優しい奴だったか！？いつもならここでは鼻先をフンと冷笑して終わりだらうが……！！

何も言えずただ口をパクパクさせてゐる俺の肩を、ポンと誰かが叩いた。ぎぎぎ、と音が鳴るんじゃないかといいうくらいのぎこちなさで首を回した先では、エルストン子爵が同情の視線で苦笑している。

「残念ながら、夢じやないよ」

それは天使の慈悲か惡魔の宣告か、俺には何とも言つ事ができなかつた。

それからしばらくして子爵夫人とキャロライン嬢が揃いピクニッケに出かけたものの、ローランドは大半の時間をミス・マー・ガレットとその親友のために費やし、残りの時間も子爵と議論するなどで

2人の貴婦人のお相手はもっぱら俺が務める事となつた。

デイヴィッドのおまけとして付いてきたつもりが、主役級の扱いになつて戸惑うばかりだ。

何だか生贊にされるために自分が連れて来られたような気がしたし、おそらくその考えは間違つていないのでだろうが、まあ仕方ない。少なくとも、マー・ガレット嬢に対するローランドを見続けるよりは遙かに精神衛生上楽であつたので、むしろ喜んで務めたくらいだ。何しろマー・ガレット嬢と共にいる友人といつたら、日頃の無愛想が何かの間違いかと思うくらい表情が豊かで、実に楽しそうなのだ。それでも後からマー・ガレット嬢が「今日はいつもよりずっと表情が乏しくて堅苦しかった」ともらしたのだから、普段はどれだけ寛いでいる事が想像するに恐ろしい。

絶対間近で見たら精神発狂するという妙な自信がある。

「…お前が少女趣味だとは知らなかつた」

子爵家からの帰り道でポツリと口にすると、恐ろしく冷たい目で睨まれた。

「冗談だよ。そんな恐い目で見るな」

そう言いながらも、彼の様子からローランドは本気でマー・ガレット嬢を想つてゐる事を確信する。

妹のように可愛がつてゐるにしては、朝会つた時彼女がすり抜けた際に見せた表情は切なすぎた。

子爵家に通い詰めているのも、マー・ガレット嬢がいるからなのだろう。子爵令嬢にご執心という噂は事実だつたというわけだ。

…もつとも、相手は噂と違つていたけれど。まさかキヤロライン嬢ではなくその下の14歳のマー・ガレット嬢だとは誰も思つまい。

ただ、友人としては大いに納得できる選択ではある。

マー・ガレット嬢はまだ少女だという事もあつて、普通の貴婦人ではない天真爛漫さと活発さを持っている。幼いがそれなりにしつかりした考え方も持つてゐるし、話していく楽しい。変わつたところがあるのは否めないがそれすらも微笑ましく思え、愛敬のある笑顔

は実に魅力的だ。

つまるところ、今まで誰にも心を開かなかつた『氷の貴公子』を動かすには持つて来いの人物というわけで：

「なあ、朝子爵が言つてた『今は』って、もしかしてそういう意味？」

返答の期待は半分くらいしかしていなかつたが、驚いた事にローランドは仮頂面を浮かべながら、でもどこか不貞腐れたようにポツリと答えてくれた。

「口約束はしているよ。もちろん数年後の話だが」「なるほど。つまり子爵には了解を得ているんだな」

「了解といつもともと提案してきたのはエルストン子爵の方だ。まあ、冗談半分といった感じではあつたけれど」

なるほど。確かにそれなら納得だ。それにしても、あの喰えない子爵はローランドが何を求めているのかよくわかつた上で、次女ではなく末娘を勧めてきたとしか思えない。

「まあ、お前が幸せになれるなら俺はそれでいいと思うぞ」「苦笑しつつもそう返したら、ローランドは實に幸せそうに笑つた。

ああ、絶対こいつ幸せボケしていやがる。

本当に、俺が知つていたローランドと、表の皮だけ一緒に中身は別人なんぢやないかと思うくらいの違いだ。けれど、こいつがもつと少年の頃は、確かにこんな純粹でやわらかな一面もあつたなと思ひ返せば、やはりマーガレット嬢と一緒にいる時のローランドの方が本来の姿なのだと思う。

こうやって、氷が溶けたかのような笑顔を俺が見られるだなんて思いもしなかつた。

羨ましい事だ。

年が離れていようと少しくらい相手が変わっていようと、たつた一人その人だけを欲する。そう思えるだけの相手が見つかるつて事は相当貴重で珍しい。ローランドには是非そのたつた一人の相手と幸せになつてほしいと思つ。

友の顔を見ながらやれやれ、と息を吐く。

友とその幼い想い人のために、どんな協力ができるかと考えながら、俺は流れゆくロンドンの街並みに視線を移した。

訪れるのは秋のはずなのに、なんだかとても温かそうな景色だった。

## 番外編 伯爵の友人観察日記（後書き）

： 実は書いて一番楽しかったお話です（苦笑）

フィリップ（伯爵）の一人称が書いてとても書きやすかった\

誤字脱字、表現間違いなどがあればご指摘ください。よろしくお願  
いします。

では、これでライラックの庭シリーズは一度閉じようと思っています。  
お付き合いいただきありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9932/>

---

ライラックの庭

2010年10月8日12時26分発行